

コロナパンデミックの現状と話題

川上 一郎

図-1 日本の週末興収推移 (2018-2021)

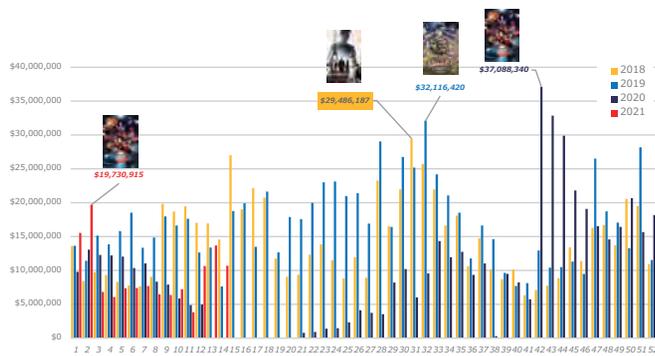


図-2 日本の週末興収推移 (2020-2021)

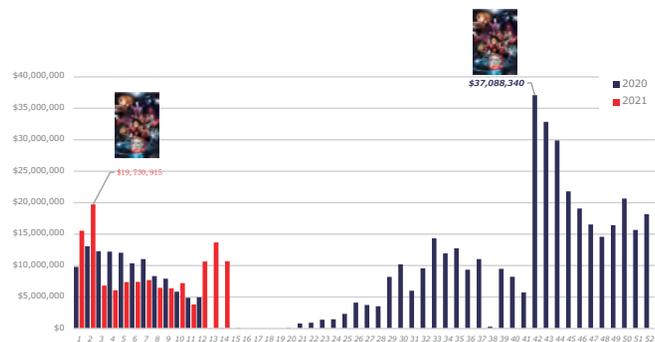


図-3 米国の週末興収推移 (2018-2021)

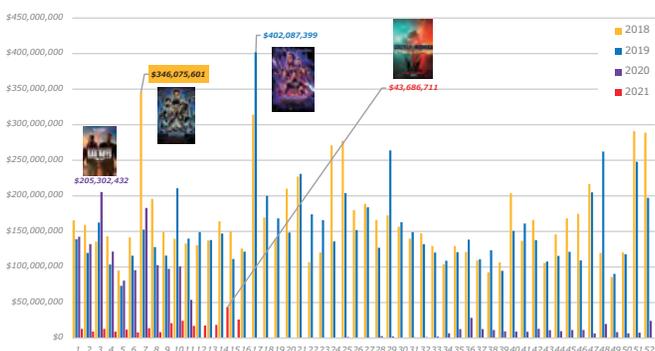
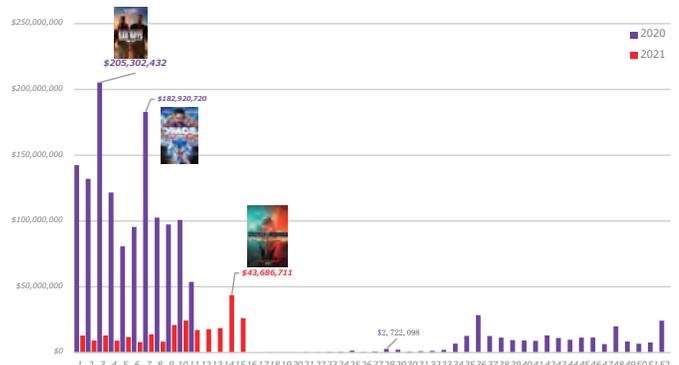


図-4 米国の週末興収推移 (2020-2021)



さて、今月号では中国武漢での集団感染から端を発した中国コロナは50種類以上の変異型が検出されスペイン風邪を上回るパンデミックとなっている。日本でのコロナワクチン接種も遅々として進んでおらず、大半の国民がワクチン接種を終えるのは年末となりそうであり、日本での対策遅延はあきらかに人災といえる。

世界の映画興行業界においてもコロナ感染拡大に伴い、休業や観客数規制、そして新作が配給されないままネット公開に切り替えられてしまう等の複合要因が重なり、厳冬期や氷河期と評される状態が昨年から続いており、以前の状態に戻るのには2023年以降ではとの観測が強い。

今月号では日本・米国・英国・フランスそして中華人民共和国と大韓民国における2018年から2021年4月までの週末興行収入の推移や、前年度比マイナス82%の興収源となった激動状態の米国における作品封切り数や平均興収などの詳細について解説するとともに映画館廃業の動きなどについて紹介していく。

これまでの連載記事でも紹介しているが、映画王国米国でも年間の客席稼働率（[観客席数×上映回数]/観客数で全ての観客席が上映ごとに満席となる状態が客席稼働率100%である）は15%程度であり、平日の客席稼働率は3%未滿となっている。従って、週末の観客動員が多く無ければ映画館経営は成り立たない背景がある。

まず、日本の映画興行業界では欧米のような外出禁止命令が出されることは無かったが外出自粛の動きや、映画館側での自主的な観客制限もあったことにより、2018年の週末平均興収が\$14.8ミリオン、2019年が\$16.9ミリオンであったのに対して、昨年4月の緊急事態宣言後にはほぼ2ヶ月間の休館状態となり、平均週末興収は\$9.44ミリオンであったが、**図2**に示しているように10月公開の“劇場版「鬼滅の刃」無限列車編”が興行記録を次々と塗り替える空前絶後の大ヒットとなったために奇跡的に息を吹き返したといえる。

日本映画制作者連盟の発表資料では、令和元年の総興行収入2,611億円に対して、令和二年は1,433億円と前年の54.9%であったが、邦画部門の興収は令和元年の1421.9億円に対し1092.8億円と前年度比76.9%の低下にとどまったが、洋画部門は令和元年の1189.9億円に対して340億円と前年度比28.6%でしか無かった。

洋画部門については、ハリウッド各社が米国内での大規模封切りが不可能となったことから大作の公開時期を一齐に先送りした影響が大きい。

邦画部門の興収も“鬼滅の刃”がたたき出した365.5億円の興収が無ければ前年の51%でしか無かった。業界関係者の間では“鬼滅の刃”が無ければ米国と同様に前年度比マイナス80%まで落ち込んでいたのがマイナス55%でとどまってくれたことは奇跡に近いと言われている。

さて、日本の週末興収の推移を見てみると、2018年の週末興収最高額となったのは第31週で、“Mission: Impossible - Fallout”の封切り初日であった。2019年は第32週の“劇場版「ONE PIECE STAMPEDE”上映週であり、2020年は第42週の“劇場版「鬼滅の刃」無限列車編”封切り週が圧倒的興行成績であり、117分の上映時間であることから一日の間に12回の上映を行った映画館も出現した。観客数制限が無ければ2倍以上の興行収入ではと推測される。

図2は2020年から現在までの週末興収であるが、2020年第13週は興収総額が\$12,158にまで激減し、21週に\$790,386と微増するものの、年間平均週末興収\$9,442,145のわずか8%でしか無く、実質的に開店休業状態となっていた。その後も都道府県ごとに休業要請、ショッピングモールに立地しているシネコンでは営業時間制限があるなどの状態であったが、42週の“鬼滅の刃”封切りで最悪の倒産連鎖を免れたと言って良い。

また、今年に入っても第2週の“鬼滅の刃”が最高の興収となっているがコロナの変異型感染拡大で状況改善の見通しは立っておらず、ハリウッドの大型作品は来年以降でしか封切られないために、年間の興行収入はさらに悪化する可能性が強い。

さて、激動の波にもまれ続けた米国の状況を紹介します。**図3**は2018年から2021年の週末興収であり、2018年は第7週の“Black Panther”が、2019年は17週の“Avengers: End Game”が、そして2020年は第3週の“Bad Boys for Life”が

図-5 米国の週末封切スクリーン数 (2018-2021)

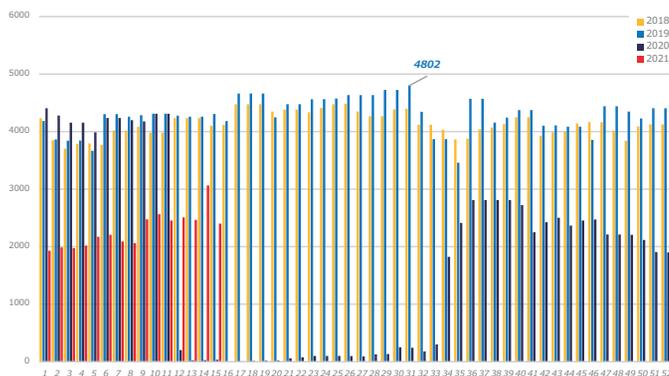


図-6 米国の週末封切スクリーン数 (2020-2021)

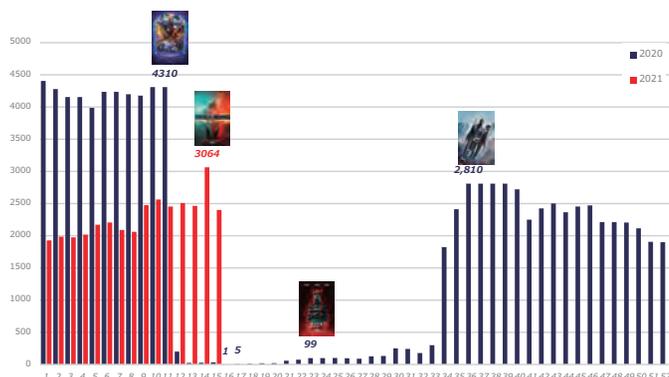


図-7 英国の週末興収推移 (2018-2021)

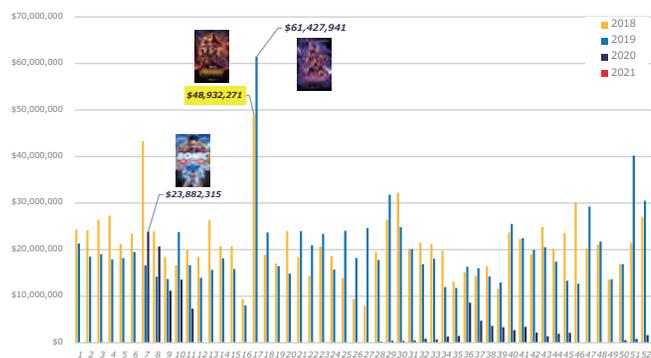


図-8 英国の週末興収推移 (2020-2021)

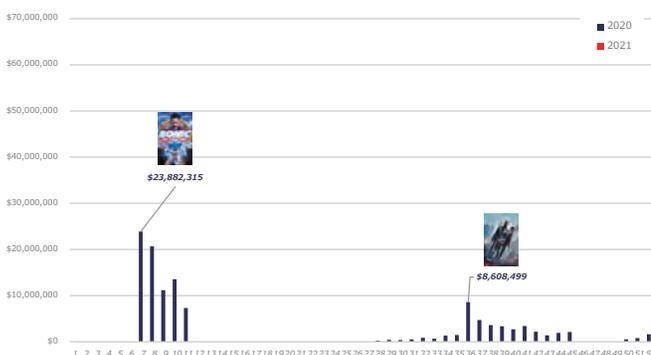


図-9 フランスの週末興収推移 (2018-2021)

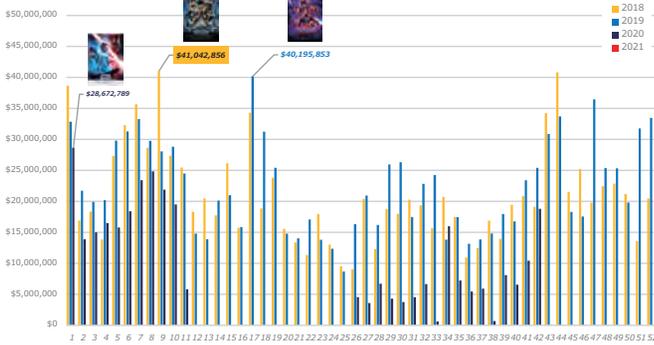


図-10 フランスの週末興収推移 (2020-2021)

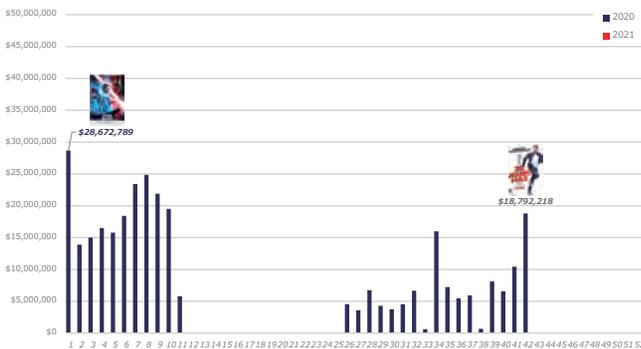


図-11 中華人民共和国の週末興収推移 (2018-2021)

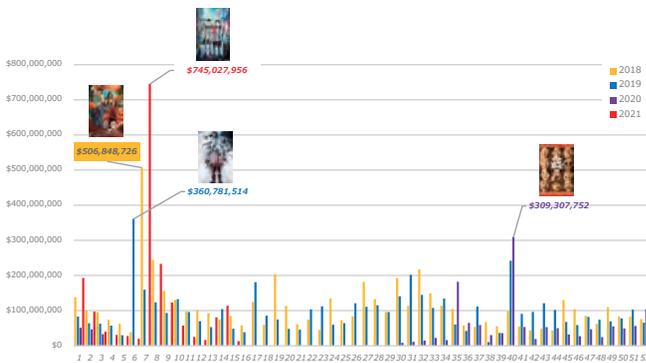
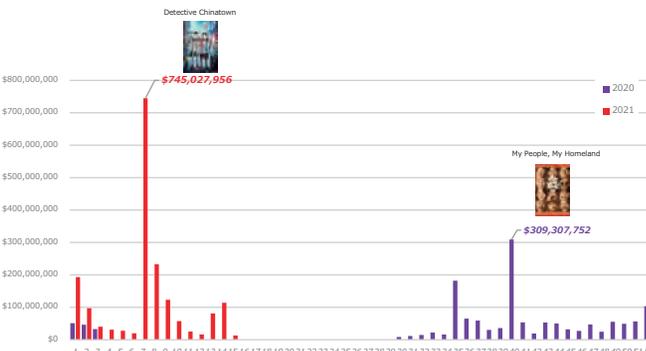


図-12 中華人民共和国の週末興収推移 (2020-2021)



最高の週末興収を挙げている。なお、この“Bad Boys for Life”の第5週上映時は所用でサンフランシスコに滞在しておりダウンタウンのAMCシアターのDolby Cinemaで鑑賞することができ、映画館閉鎖がまもなく到来するとは全く予測していなかった。

2021年も現時点では第14週の“Godzilla vs. Kong”が週末興収最高となっているが、何分にも大都市圏での映画館が稼働しておらず、感染者の少ない地方都市のIMAXのみが集客できている状況である。

さて米国映画興行業界に激震が走ったコロナパンデミックの影響を顕著に示しているのが図4の2020年から2021年にかけての米国週末興収の推移である。第12週以降は限定された地方都市の数スクリーンが営業するのみで、話題の新作は一切配給されない状態が延々と続き、30週を超えてやっと全米の週末興収が100万ドルを超えた。

第15週は全米週末興収が\$3,675の最低記録となり、観客数に換算すると週末3日間でわずか360人しか映画鑑賞できなかったことになる。ちなみに、この最悪の週で最高興収となる\$1,710を売り上げたのはIFC Films配給の“Swallow”が1スクリーンで上映されているのみであった。

このあおりを受けたのが話題となっていた大作“Tenet”であり、封切り週の全米全ての興収が\$28,429,491にとどまり、8月28日から30日の先行公開での興収は324スクリーンで\$1,715,193、9月4日～7日(Labor Dayの休日含む)の拡大公開では2,810スクリーンで\$11,628,751の興収となりスクリーン平均では\$4,138としかならず、4日間の興行でスクリーンあたり400人の観客しかこなかったことになる。

怪獣物の大作である“Godzilla vs. Kong”も第14週公開作品の中では首位であったが、封切りスクリーン数が2,409と半減しており、封切り初日となる3月31日のスクリーン平均興収は\$4,028と観客数が4百人の寂しい結果となった。ただし、作品の魅力以前に映画館の休業や観客数制限が原因であることは言うまでも無い。

米国の興行スタイルでは4,000スクリーンを超える大型作品が毎週上映されていることが最大の特徴であるが、図5に示しているように2020年のコロナパンデミック以降は話題作“Tenet”の封切りも2,810スクリーンであり、今年に入って最大の話題作である“Godzilla vs. Kong”も3,064スクリーンにとどまっている。ロサンゼルスやニューヨーク等の大都市圏では映画館が全面再開とはならず、カリフォルニア州では大都市部は定員の25%もしくは100人以下であり、中規模の都市では50%または200人以下となっており、ニューヨーク州では25%または50人以下等となっており、100%で営業できるのはアラスカ州・テキサス州・ウィスコンシン州(<https://www.cinemasafe.org/>)等と限定され、その他の州でも15%～50%の定員規制が行われている。

米国では国民の5割程度がワクチン接種を終えて終息に向かうのではとの希望的観測もあるが、ネット配信重視の流れや話題の大型作品公開先送りの流れが止まらないことから以前のような4,000スクリーン越えの封切り作品が隔週で全米公開される状態には戻ら

ないとの見方も強い。

図7は2018年～2021年にかけての英国の週末興収推移である。2020年に入り2度のロックダウンがあり映画興行業界にとっては悪夢としか言い様がない。

2018年は17週の“Avengers: Infinity War”が週末興収最高額をたたきだし、2019年17週も“Avengers: End Game”が2年連続で週末興収最高額をたたき出した。2020年7週は“Sonic the Hedgehog”がロックダウン開けで週末興収最高額をたたき出したが、その後12週から27週までは映画館が閉鎖され、30週には話題作“Tenet”が公開されたが人気シリーズ“Avengers”の興収に対して2割未満の惨憺たる結果となった。

なお、英国の映画館は今年にはいっても再開されていない。

図9はフランスの状況である。2018年9週は“Black Panther”が、2019年17週は“Avengers: End Game”が、2020年1週は“Star Wars: Episode IX - The Rise of Skywalker”が週末興収最高額をたたき出した。

2020年は1週の“Star Wars”が健闘したものの、12週からロックダウンにはいり25週までロックダウンが継続した。26週から再開し、42週は\$18,792,218の週末興収をとなり、“30 Jours max”が最高の売上であったが、43週からロックダウンと4月3週の時点でもフランスの映画館は再開されていない。

さて、今回のコロナパンデミックの発生源である中華人民共和国の状況を図11と12に示している。2018年7週は“Monster Hunt 2”、2019年6週は“The Wandering Earth”、2020年40週は“My People, My Homeland”、2021年7週は“Detective Chinatown 3”が週末最高興収でのトップ興収となっている。

2019年の“The Wandering Earth”は中国初のフル3DCGによるSFアクション大作で、2020年の“My People, My Homeland”は中国お決まりの全国人民代表大会開催時に全国封切りされるいわゆる中国礼賛の愛国作品である。

図12に示しているように、2020年4週から30週までは映画館が閉鎖され、2020年30週より映画館が逐次再開されていた。なお、2021年の11週と12週には“Avatar”が2週間限定で再公開され、“Avengers: End Game”の興収記録を上回る2.84億ドルの総売上を達成し、歴代最高興収作品の座を取り戻している。

なお、6ヶ月にわたる映画館閉鎖後にも6,000(7,000との報道もある)スクリーンを新設し12,700館75,581スクリーンと拡大させており、最近の愛国心鼓舞政策とも併せて共産党広汎宣伝部の指導の下で独自の映画戦略をとっている。

図13と14は大韓民国の状況である。2018年31週は“Along With the Gods: The Last 49 Days”、2019年17週は“Avengers: End Game”、2020年4週は“The Man Standing Next”、2021年12週は“Godzilla vs. Kong”が最高週末興収

図-13 大韓民国の週末興収推移 (2018-2021)

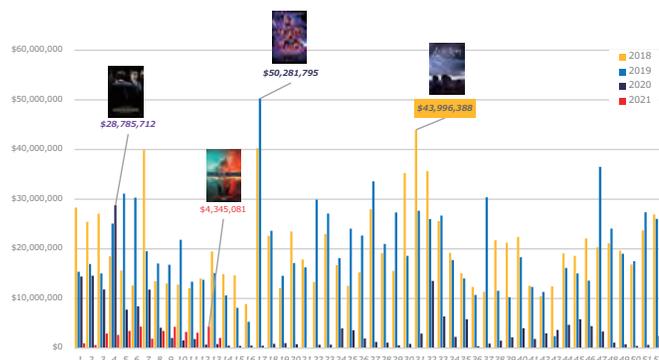


図-14 大韓民国の週末興収推移 (2020-2021)

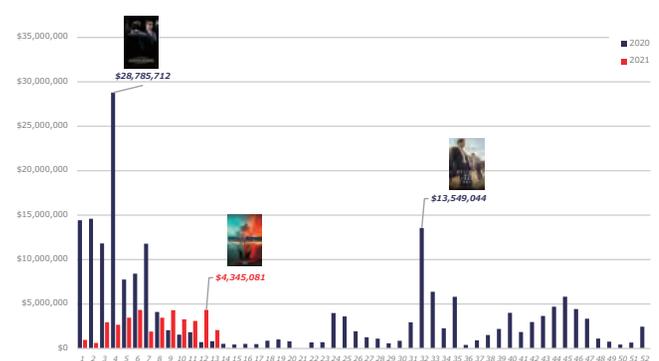


図-15 米国興行収入の推移と対前年度比変化率

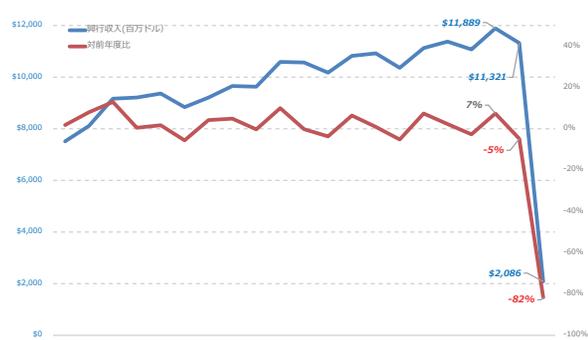


図-16 米国の公開作品数と平均興収 (百万ドル)

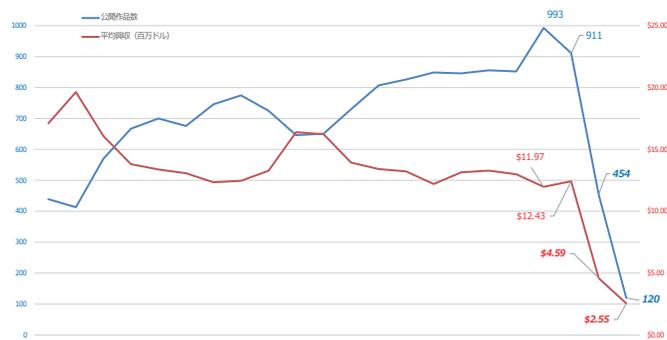


図-17 廃業宣言で話題を呼んでいる Arclight シネマ



ハリウッド版ゴジラのプレミア上映



シネラマドーム全景（サンセットブルバード側）



シネラマ上映風景



シネラマ撮影カメラ

のトップとなっている。

コロナによる映画館営業は完全閉鎖までには至っていないが都市圏の映画館は休業状態となり 2020 年の 14 週以降は通常の 1 割未満の興収しかあげられていない状況である。2020 年 32 週には “Deliver Us from Evil” がこの時期としては高い興収となっている。

さて、これからは米国で始まっている映画館閉鎖について述べてゆく。図 15 は 2000 年以降の興行収入の推移と対前年度比の変化である。2020 年は対前年度比で実にマイナス 82% と悪夢のような状態となっている。図 16 に示している年間公開作品数と公開作品の平均興収を示しているが、一般的には興収の 50% 程度が映画館側にチケット料金の取り分として入り、観客一人あたり \$3 ~ \$4 の売店売り上げが収益源である。

2018 年には 993 作品が公開され、平均興収は \$11.97 ミリオンであり、平均チケット価格が \$10 であることから平均観客動員数は 119 万人となる。2020 年には公開作品数が 454 本にまで半減し、平均興収に至っては \$4.59 ミリオンにまで減少し、2021 年では 4 月までの公開作品数が 120 本で平均興収は

\$2.55 ミリオンでしか無い。

ハリウッドの公開作品数が以前の状態に戻るのには 2023 年以降といわれており、さらにワーナーやディズニーの封切りと同時にネットで配信（\$30 程度の課金がある）することが常態化してきていることから、以前のような話題作が封切られる週末に映画館に行列ができる “ブロックバスター”（ニューヨークのブロードウェイにある映画館の待ち行列が隣にブロックにまではみ出して並んでいる光景を意味している）は再現しないとされている。

図 17 は、ロサンゼルスハリウッド・パインとサンセットの角に立地しているシネラマドームが売り物の Arclight シネマである。

この Arclight を基幹映画館としてロサンゼルス周辺に 16 館を経営しているパシフィックシアターが今後の映画館経営に展望が見いだせないとして廃業宣言を行い、ハリウッド関係者で大きな話題となり、シネラマドームをハリウッド文化遺産として保存できないかと連日報道されている。

写真上段左側はハリウッド版ゴジラのプレミア上映でシネラマドーム天井にゴジラが口を開けて怪光線を放っている写真であるが、このシネラマドームでプレミア試写会を行うことは一種のス

テータスにもなっていた。下段左側がシネラマ上映風景であり下段右側にしめしているように3眼レンズの専用カメラで撮影された映像を3台の映写機で連動上映する仕組みである。

このArclight シネマは、筆者がロサンゼルス訪問時に何度も訪れた思い出深い映画館であり、アカデミーのテクニカルコミッティーがある場所から2ブロックと近いために、アカデミー訪問後には必ず立ち寄っていた。なお、最近は平日昼間の上映はやめて夕刻以降の上映のみとして人件費削減を行っていたのが思い出される。

図18は、米国で8,000スクリーンを展開するAMCエンタテインメントの株価チャートである。中国ワンダグループが買収に乗り出したころには\$30台であった株価は\$2にまで急落し、上場廃止寸前までいっていたが映画館の一部再開などの動きから数ドル単位で株式売買に参加できる個人投資家の投機対象となり\$13にまで急騰するなどの動きを繰り返し4月16日時点では\$9.33まで回復している。

所有する映画館の家賃支払いで現金が必要なために株価急落後に新株発行を繰り返して年内いっぱいの家賃支払いに充てられる資金は調達できたとしているが、6割以上を保有していた中国ワンダグループの保有分を半分以上買い取るために投資ファンドから借り入れた資金返済を含めて今後の展開は非常に不透明であり、はたして来年まで生き残れるのかRegalもしくは他の映画興行チェーンに会社清算手続きを経て吸収されるのかは神のみぞしるといった状態である。

さて、少しは明るい話題を紹介させていただく。図19はスウェーデンから発表されたカルト映画専門のストリーミングサービス“Cultpix”である。スウェーデンでホームビデオレーベルや映画アーカイブなどの研究を行っているKlubb Super8が映画興行に関連する世界的话题を提供しているCelluloidJunkie.comの創設者であるPatrick von Sychowski氏と共同で創設したストリーミングサービスであり、400作品から配信サービスを開始し、年末には2倍の作品が配信可能になるとしている。

年会費は\$49で無制限視聴が可能となり、コンテンツパートナーには、AmericanGenre Film Archive (米国)、ARRI Media / Lola Films (ドイツ)、Donner Productions (フィンランド)、British Film Institute (英国)、Eurocine (フランス)、Extralucid Films (フランス)、Forgotten Entertainment (ドイツ)、Hans Hatwig (スウェーデン)、Impulse Pictures (米国)、Klubb Super 8 (スウェーデン)、Nikkatsu (日本)、Nordisk Tonefilm (スウェーデン)、Maxitron (スウェーデン)、Penny Video (イタリア)、SF Studios (スウェーデン)、Something Weird video (米国)、Studio S (スウェーデン)、SVT (スウェーデン)、Synapse Films (米国) が参加している。

古いジャンルの映画をストリーミングサービスに載せる新しい試みであり、日本でもDVDレンタルやテレビ局系列のストリーミングには入ってきそうも無いジャンルで配信サービスを行う挑戦者の出現を願うところである。

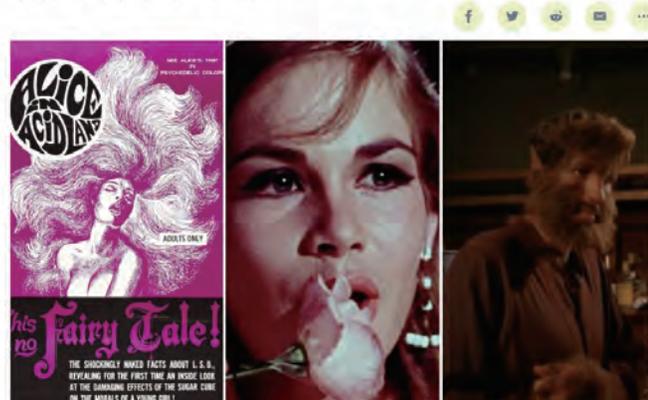
図-18 AMCの株価推移



図-19 クラシックカルトフィルム配信サービスの登場

Classic Cult Film Streamer Cultpix Launches With 400 Titles (EXCLUSIVE)

By Naman Ramachandran



引用文献

- ・図1～図16はIMDB Proが運営する<https://www.boxofficemojo.com/>によるデータを解析している。
- ・図17の上段写真(左右)は<https://www.discoverlosangeles.com/>のアークライトシネマ紹介記事から、下段の上映風景とシネラマ撮影カメラの映像は<https://losangelestheatres.blogspot.com/2017/02/cinerama-dome.html>から引用している。
- 3) 図19のCultpixの紹介記事は<https://variety.com/2021/streaming/global/classic-cult-film-streamer-cultpix-launch-1234944761/>から引用している。

Ichiro Kawakami
デジタル・ルック・ラボ